

# 我、山に向かいて

作:岡崎ルツ子

演出:小川政弘

## 登場人物

若宮節子(語り手)

少女時代の節子

母 安藤千代

父 安藤達吉

長兄 紀男

長姉 兼子

次姉 鶴代

照雄 小学校の同級生

ミヨ子 同上

功二 同上

田代正子 本屋のおかみさん。

後藤 本屋の店員

前川先生 中学の担任

鎌田 姉鶴代の夫

看護学校の同級生

牧師

## < 前編 >

(東山温泉。小学校昭和24年度卒業生同窓会)

照男 「はぁぁ～、会津磐梯山は～宝の山よ～、笹に小金がえ～また、なり下がるう～。(一同和して)小原庄助さん、なんで身上つーぶした、朝寝朝酒朝湯が大好きで、そーれで身上つーぶした、はぁぁ、もっともだぁ、もっともだぁ。(大笑いと拍手)」

タイトル 岡崎ルツ子・作 ドラマ「我、山に向かいて」 その前編

節子 「照男君の歌聞くの、小学校卒業以来ね。上手いわ、やっぱり。」

照男 「いや、節ちゃん、久しぶり。なに、まだキリスト教やってんの？」  
ミヨコ 「節ちゃんの旦那さん、牧師さんなんだよね。」  
照男 「へえ。どんな人？」  
節子 「ふふ、顔の四角い人。」  
照男 「なんだ、それじゃ俺にもチャンスあったなあ。」  
ミヨコ 「照男ちゃん、節ちゃんのこと、好きだったもんねえ。(皆、笑う)」  
照男 「でも、ちっとも声かける感じじゃなかったなあ、なんだか大人っぽかった。いつも考え込んで、本読んで。俺なんかお呼びでねえって感じで。」  
功二 「照男ちゃんなら、皆お呼びじゃねーだよ。(一同笑い)」

N 還暦祝いの小学校の同窓会は楽しいものでした。けれど、なつかしい人たちに会っていると、記憶の底にしまっていたいろんな出来事が、よみがえってきたのです。そう、確かに私は無口で孤独な少女でした…。

N (赤ちゃんの産声)昭和 12 年の晩春、福島県大笹生(おおざそ)村の貧しい開拓農家の 7 人兄弟の末っ子として、私、安藤節子は生まれました。

千代 「すまないね、紀男。またこんな年で赤んぼなんて産んで。お前の出征前だったのに。」  
紀男 「なあに、母ちゃん、子は宝だよ。もっと頑張って 10 人産んだらお国から表彰されるぞ。」  
千代 「なにも、紙切れ一枚もらったって。米くれるんならいいけどな。」  
紀男 「はは、そだな。」

N 私は一番上の兄の紀男の顔を覚えてはいません。兄は昭和 17 年、わたしが 5 つの時に、満州で匪賊(ひぞく)、中国のゲリラ部隊との戦闘で亡くなりました。家には毛の帽子を被り、馬に跨った軍服姿の兄の写真が 1 枚あるきりです。私が小学 2 年生の時、戦争は終わりました。だからといって生活は楽にはならなかったのです。父は酒は飲みませんでしたが、いつも一獲千金を夢見ては、失敗していました。荒地をいくら開墾しても、ろくな作物が採れるはずはなかったのです。

(台所で千代が夕飯の仕度をしている。)

節子 「ただいまあ。」  
千代 「お帰り。」

節子 「あれ、兼子姉ちゃんは？」

N いつもは母が畑仕事に行っており、上の姉の兼子が夕飯の仕度をしているはずなのに…。

千代 「兼子は、宇都宮に行ったんだ。」

節子 「宇都宮？なんで…？」

N 驚いて聞き返すと、母は顔を背けました。父は腕を組んでむっつりと座っています。

達吉 「…向こうは、宇都宮でも一、二の芸者置屋だ、何の心配もいんね。」

千代 「そんなあんた…。(泣き伏す)」

達吉 「なあに、兼子だってお前、きれいな着物着て喜ぶべ。」

千代 「う、う、う(激しく泣く)。」「

節子 「兼子姉ちゃんが、芸者に？(はっと気付いて)姉ちゃんっ。」(ガラっ、駆け出す。)

N 私は走りました。

モノ 「姉ちゃんが売られちゃう。売られちゃう。」

節子 「(叫ぶ)姉ちゃん、姉ちゃん。」(走る音)

N 阿武隈川の土手をひたすら駆けていくと、渡し舟が小さく見えました。見覚えのある紺(かすり)の着物を着た姉が乗っています。(舟のこぐ音小さく)

節子 「兼子姉ちゃーん。」

兼子 「節子、元気で一。」

節子 「姉ちゃーん。」

N じきに舟は見えなくなりました。

節子 「あ、きれい…。」

N 泣きつかれて見上げた私の目に映ったものは、吾妻小富士でした。磐梯山ほど有名で高くはありませんが、富士の名のとおり、美しい姿の山です。毎日見慣れていたはずのそれが、夕間の中でくっきりとそびえておりました。

モノ 「あんなにきれいな山、どうやってできたんだろ。きっと神様が造ったんだ。」

N 私はそれから何かあるたびに吾妻小富士を眺めるようになったのです。上の姉の兼子と再会できたのは、それから何年もたって、姉がずっと年上の資産家の後添いになってからでした。

(大笹生村の家)

千代 「ほら、節子、茶碗の下の方から食え。卵が入ってっから。」

節子 「え、卵。」

千代 「しっ、かき混ぜないで食べる。」

節子 「う、うん。」

千代 「急いで。」

(引き戸いきおいよく開いて達吉帰ってくる。)

達吉 「あー、疲れた。」

千代 「お帰り。」

達吉 「節子、帰ってたのか。このガキが。」

節子 「……」

達吉 「めし、食ってんのか。なんだ、奉公先で食わしてもらえ。」

N 顔をしかめてそう言うと、父は出ていってしまいました。子供にゼイタクな卵を食べさせたことが知れたら母が怒鳴られてしまいます。私は大慌てで麦飯と卵をほとんどかまずに飲みこみました。

モノ 「子供にご飯を食べさせんのが惜しいなんて、あんなの父親じゃない。ひどい、ひどいよ。」

N その頃、私は福島市にある田島書店に、住みこんで働きながら、小学校に行かせてもらっていました。その日は、久しぶりに休暇をもらって、家に帰っていたのです。わたしは、父への憎しみを募らせながら、福島の店に戻りました。

後藤 「節ちゃんほら、吉屋信子の本、入ったよ。」

節子 「ほんと？」

後藤 「汚さないでそうっと、読むんだぞ。」

節子 「うん。」

N 店員さんたちは、小さな私に親切で、本好きな私のために新刊本を店頭に並べる前にこっそり読ませてくれたりしました。私は吉屋信子の「花物語」や路谷虹児の美しい挿絵に夢中になりました。それは苦しい現実をいつときでも忘れさせてくれたのです。

(正月、呼びかう声。次々に)

節子 「はい、いらっしゃい、いらっしゃい。」

後藤 「初売りだよ、お安くしとくよ。」

N 新しい年に初めて店を開く“初売り”の日は、駅前通りはにぎわいます。田島書店では初荷を下ろして、得意先回りの後、早めに店を閉め店員全員で正月料理を囲むのが習慣でした。

正子 「ちょっと、節ちゃん、あんた、お雑煮の作り方も知らないのかい。」

節子 「す、すみません。おかみさん。」

正子 「すみませんって、こんなかつお節いっぱいどうするんだい。雑煮のだしは鶏に決まってるんだよ。」

節子 「...」

正子 「雑煮も作れない、黒豆も煮れないんじゃあ、あんたの母さん、なんにも教えてくれなかったんだね。」

節子 「...」

N 作れるはずはないんです。おせちも雑煮も食べたことはなかったんですから。家では、タンポポやオオバコ、サツマイモのつるまで食べていたのです。

(小さい風呂場。湯音、ちゃぷんと。)

節子 「アーツ、疲れたなあ。」

N 湯の中に浮かぶごぼうのように細い自分の足を見ると、なんだか悲しくなりました

節子 「あ、お山。」

N 顎を風呂釜のふちにのっけて外を見ると、ぼた雪の降る中、大好きな吾妻小富士が雪に覆われていました。

モノ 「家を見たのとおんなじ形だ....。」

N しきりに家のことが思いだされます。優しいけれど父に逆らえない母。借金ばかり作って、姉の兼子まで売ってしまった父。

モノ 「あんな父ちゃんじゃなかったら、あたしはこんなに大変じゃなかった。ああ、誰か、誰かあたしを助けに来て下さい。」

N わたしは、いつのまにか山に向かって祈るような気持ちでいたのでした。雪はしんと音もなく降り、夜のやみの中に沈んでいきました。

< 後編 >

(合唱)「上げば尊し、我が師の恩...」

前川 「節子、どうしても上の学校には行かないのか。」

節子 「はい。」

前川 「だがなあ、お前の作文は、なかなかいいものがある。成績だっていいんだし、勉強続けられたらなあ。先生が御両親にお願いに上がってもいいんだぞ。それでもだめか。」

節子 「...はい。」

前川 「...そうか、残念だな....。」

N 昭和28年春、私は中学校を卒業しました。卒業式の日、学校を出ると、大好きな吾妻小富士が私を見下ろしていました。

モノ 「私は、私はこれからどうしたらいいんだろう。」

タイトル 岡崎ルツ子・作 ドラマ「我、山に向かいて」その後編

N 私は安藤節子。福島県大笹生村の貧しい開拓農家に生まれました。一番上の兄は戦死、姉の兼子は借金のかたに芸者に売られ、末っ子の私は小学生のときから福島の本屋に住みこみで働きながら、学校に通っておりました。中学校を卒業すると、昼間は店番、夕方は食事の仕度、夜には結核で自宅療養をしていた叔母の家に手伝いに行きました。一日中働いた私の唯一の楽しみは、布団に入る前の読書の時間でした。

モノ 「ナイチンゲールか。素敵だなあ。」

N ナイチンゲールの伝記は、気に入って何度も繰り返して読みました。いつしか私は、彼女のような看護婦になることを夢見ていました。夜のわずかな時間を使って必死に勉強するようになり、そのかいあって、私は念願の看護学校に合格したのです。

N 病院付属の看護学校だったので、私は看護婦さんの入る寮に移って学校に通いました。叔母の家の手伝いも続けていて、勉強は大変だったのですが、死にもの狂いでがんばりました。

(讃美歌,オルガン伴奏で低く流れる。)

N 通学の途中、野菜畑の真中に小さな教会があり、時々、讃美歌が聞えて来たりしていました。集会に行ってみたい気もしましたが、忙しいままに日々が過ぎていくばかりでした。そんなある日、実家に帰った私は、母から思いがけないことを知らされました。。

節子 「えっ、鶴代姉ちゃんが病気？悪いの？」

千代 「畑仕事も出来ないで、寝てるらしいんだよ。節子、お前、様子見てきておくれ。」

N 2番目の姉の鶴代は、大きな農家の後妻に入り、子供も3人産まれておりました。不幸な境遇を背負った兄弟たちの中でたった一人、毎日米の御飯を食べられて、幸せに暮らしていると思っていたのに...

N 行ってみると、姉は家の 2 階にせんべい布団を引いて寝かされておりました。色白で美しく、姉の顔は青白くむくんで、10も年取ったようにやつれていました。

節子 「義兄さん、どういうことですか？なんで姉ちゃんは入院してないの？」

鎌田 「鶴代を入院さす金がねえ。」

節子 「(問いつめるように)うそっ。この前、田んぼ買ったじゃないですか？田んぼ買うお金があったら、なんで入院費払えないの？」

N 普段は大人しい私の激しい剣幕に、義理の兄は驚いたようでした。その頃農家の嫁は、ただ労働力としてしか見られていなかったのです。優しい姉は病気をおして、夜遅くまで働いていたのでしょう。私が知り合いの開業医に頼み込んで入院させた時には腎臓が悪化しており、もう手遅れでした。…姉は 32 歳の若さで亡くなりました。葬儀の日は雨でした。紅葉に彩られた吾妻小富士も、この日は雨にかすんでおりました…。

N 日曜の夕方、寮で掃除をしていると、珍しくお客だというのです。玄関に出てみると、父親の達吉が立っていました。

節子 「父ちゃん…。」

達吉 「なに、ちょっと寄って見たんだ。どうだい、様子は。」

節子 「様子って？」

達吉 「お前も一人前に給料もらってるんだろ。少し家に入れてくれよ。母ちゃんにも小遣いやりたいだろが。」

N それが父の道楽に消えることは分かっていました。何とも暗い気持ちになったわたしは、財布から一枚きりの 100 円札を掴むと、父に押し付けました。

節子 「これで勘弁して。そしてもうここには来ないで。」

達吉 「なんだ、親に向かって。」

節子 「お願い、もう帰って。帰って！」

モノ 「もう、いや…。誰か、誰か助けて…」



N 父が帰った後、私は居たたまれずに寮を飛び出しました。どこをどう歩いたのか覚えていません。いつのまにかあたりは暗くなっていました。と、どこからか讃美歌が聞えてきました。街灯にぼんやりと映し出されていたのは、あの小さな教会でした。私はふらふらと歩み寄ると、教会の扉を開け、吸い込まれるように中に入っていました。数人の人が木のベンチに座っています。一人の男の人が熱心に話をしていました。私は一番後ろに腰掛けて、耳を傾けました。

穂積牧師 「…このように私たちは、さまざまな重荷を負って暮らしています。それがあんまり重くて、投げ出したくなることもあるでしょう。そんなとき、みなさんだったらどうしますか。誰に助けを求めるのでしょうか。みなさんは、この重荷を負って下さる方がいることを知っていますか。」

モノ 「誰も、いやしない。私のこんな苦しみをわかってくれる人なんて、いるはずないもの。」

牧師 「…すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます(マタイ11:28)。イエス様はこうおっしゃって、ご自分のところに来るように私たちを招いて下さっているのです。」

モノ 「イエス様…?」

牧師 「私たちの重荷がどんなに重くても、心配することはありません。なぜなら神のひとり子であるイエス様は、私たちの代わりに、十字架ですべてを負って下さったからです。このお方を信じれば、私たちは神様の平安の中に入ることができるのです。私たちは、安心してイエス様におゆだねしましょう。イエス様は、あなたを愛し、あなたを救うために十字架にかかれたからです。」

モノ 「こんな私を愛して下さる方がいるって…」

N 生まれて初めて聞いた聖書の言葉は、渴いた私の心にすっとしみとおっていったのです。その夜、私はためらわずにキリストを信じました。

学友 「なあに、節ちゃん、宝くじ当たったような顔して。なにかいいことあったの？」

節子 「そう？そう見える？あったんだ、いいこと。」

N 私は変わりました。神の助けがある、そのことがうれしくて毎日聖書を読みました。日曜日は一日中働いて、夕方の礼拝にすべりこんでお話に耳を傾ける。そのことが本当に喜びで、体の疲れも忘れていました。

(現代)

N それから程なく、わたしは、教会の青年会で一緒だった、明るくほがらかな神学生の若宮と結婚に導かれました。そして、この欠けだらけの者が牧師の妻として歩ませていただいて、もう40年の歳月が流れました。今朝もわたしは、いつものように聖書を読んでから窓の外を見上げました。目の前には、幼い時から親しんだ吾妻小富士がそびえています。

思えばわたしは、この山と共に歩んできたのです。あの、姉が売られて泣いた夕べ、神様がつくられた山として幼心に魅せられた時。ごぼうのように細い足をして、苦しきのあまり初めて山に祈った少女の時。中学の卒業式で、前途の不安に押しつぶされながら見上げた時。そして優しかった姉の葬儀の日、雨に霞む山が共に泣いてくれてると思えた時…。信仰を持ってからも、いろんな失敗や試練のときがありました。その度に、私はこの山を見上げて助けを求めました。そして神様は、この山の姿を通して、いつも必要な助けを与えてくれていたのです。

N 「私は山に向かって目を上げる。私の助けはどこからくるのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。(詩篇121編 1.2節)」

N わたしの一生を知っている吾妻小富士は、今朝も変わらず、つややかな緑に覆われて、貴婦人のようにそびえていました。

< 完 >